

救急車の適正利用の促進

～ 市民と観光客のための「くまもと街なか保健室」 ～

チーム名：Funky MW

メンバー：上嶋管嗣（代表者） 藤崎千春 前田敏永 和田光司

119番通報の中には、ベッドからの転落や明らかな軽症、病院の診療待ち時間を短縮したいといった本来の利用からみると適正でないケースが見受けられる。しかしながら、依頼主の希望があれば救急車を出場せざるを得ないのが現状である。不適正な救急車の利用は救急車出動件数を引きあげ、将来的に救急医療の圧迫に繋がる懸念がある。

そこで、私たちは「くまもと街なか保健室」を設置し、救急車の適正利用の促進に結びつけることを提案する。

1 問題・課題とその背景

現在、熊本市消防局の救急隊は、全25隊で熊本市全域（西原村・益城町を含む）をカバーしている。

平成26年の熊本市消防局の救急出場件数は、33,854件で、平成25年と比較して2,477件の増加、比率では1年で約8%も増えている。（※図1）年々右肩上がりに増えており、平成元年と比較するとなんと約3倍となっている。（※図2）

また、件数の増加だけでなく、その中身も考慮する必要がある。救急搬送の結果、軽傷（入院の必要がない症状）者の割合が、平成25年では50%、平成26年では47%と約半数を占めており、軽症者による安易な救急利用が行われているのが分かる。（※図3）

平成26年の状況（熊本市）

出場件数 **33,854**件（前年比+2477）

搬送件数 **30,272**人（前年比+2834）

1日平均 **92.7**回出場
（15分32秒に1回出場）



熊本市消防局管内24.5人に1人の割合で利用されました

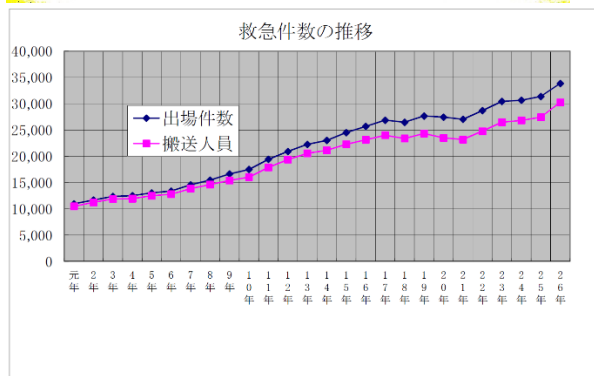


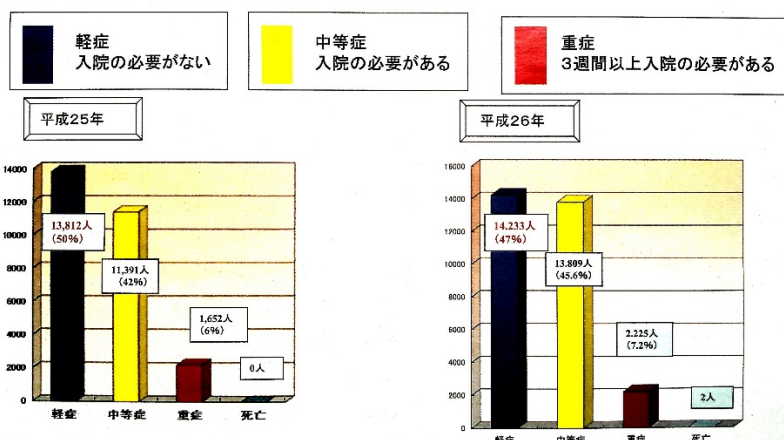
図1 平成26年救急出場・搬送件数

図2 件数の推移(平成26年熊本市消防局救急統計)

それに伴い、救急搬送にかかる時間も伸びてきている。（※図4）救急搬送の依頼があった際に救急車が消防署に待機していなければ、離れた消防署から出動することになったり、もしくは出動している現場からそのまま向かうということにもなる。そうなればさらに現場到着時間が遅れることになり、当然のことながら、現場到着時間が遅くなればそのために重症者が助からないといった事態になるかもしれない。

傷病程度別

熊本市消防局：平成26年



約50%が軽症・・・H25と比較すると中等症、重症の割合が増加

図3 平成26年傷病程度別搬送件数

関係時間

時間区分	平均所要時間	(前年)
覚知～到着 (現場到着時間)	7分 16秒	7分 6秒
到着～現発 (現場滞在時間)	12分 19秒	11分 45秒
覚知～引継ぎ (病院収容時間)	33分 50秒	32分 38秒

図4 平成26年 救急出場関係時間

今後さらなる高齢化が進み、救急出場件数も増加傾向のまま推移することが確実に視されている。真に救急搬送を必要としている人が助からないということがないように、救急車の適正利用を促進することは、『上質な生活都市くまもと』の実現には欠かせないものであると考える。

2 提言内容

「くまもと街なか保健室」とは・・・

- ・ 立地は、アクセスのよい市街地中心部
- ・ 医師1名と看護師が常駐
- ・ 電話での救急相談に24時間体制で対応
- ・ 昼間は窓口で対面での相談が可能
- ・ オープンスペースを併設し、市民が自由に立ち寄ることが可能

- ・ 観光客の急なケガや病気に対しても対応
- ・ 健康や救急活動に関する啓発活動や、講習会等にも利用

「くまもと街なか保健室」は、上記のような複数の役割を果たす新しい施設である。

まず、常駐する医師と看護師で、「くまもと街なか保健コール」として電話での救急相談を受け付ける。救急車の適正利用を促進するためには、まずは本来救急出場を必要としない軽症者の利用を減らす必要性が高いと考える。軽症者の利用については、疾病に対する知識不足により、「とりあえず救急車を呼ぼう」という意識、またモラルの低下による安易な救急車の利用も相当数あるものと思われる。

くまもと街なか保健室は、こういったどうしてよいか分からない時に相談を受け付ける場所としての機能を持たせ、119番での救急車の要請を少しでも減らせることを期待するものである。症状に応じて医療機関を紹介したり、必要と判断した場合には消防局へ即座に救急車を要請する。実際にこういったコールセンターを設置している自治体も数か所あり、平成22年に設置した大阪市では、一定の成果が出ている。（※図5）

(単位:件)

	全着信	内		病院案内	救急医療相談	救急車の必要ありと判断			その他
		eメール	FAX			大阪市内	大阪市外	他府県	
計	252,530	-	-	128,168	97,373	1,518	2,280	-	26,989
1月	25,178	-	-	13,584	8,976	146	212	-	2,618
2月	18,771	-	-	9,520	7,138	115	159	-	2,113
3月	20,832	-	-	10,635	7,902	119	194	-	2,295
4月	19,340	-	-	9,546	7,702	121	161	-	2,092
5月	23,250	-	-	12,196	8,681	115	172	-	2,373
6月	18,769	-	-	9,229	7,395	123	162	-	2,145
7月	19,828	-	-	9,644	7,994	107	201	-	2,190
8月	20,984	-	-	10,942	7,818	124	183	-	2,224
9月	18,910	-	-	9,149	7,722	101	195	-	2,039
10月	19,130	-	-	9,191	7,823	145	205	-	2,116
11月	20,538	-	-	10,159	8,359	144	207	-	2,020
12月	27,000	-	-	14,373	9,863	158	229	-	2,764

図5 H26年 救急安心センターおおさか利用状況

また、「くまもと街なか保健室」では、医師・看護師が常駐することを利用して、昼の時間帯は保健室内で対面での各種相談も可能である。健康に関する不安や、病院の利用方法など、市民の健康を増進するための一助としたい。

さらに、保健室内にオープンスペースを作り、相談のかたわらで休憩をしたりくつろいだりできる場所も提供する。室内には、救急隊の仕事の中身や現状に触れられる物や端末等を置くことで実際の救急現場を学ぶことも出来るようにし、適正利用の促進に寄与する場所とする。

このスペースは、配置を変えることである程度の広さにすることも可能で、これを利用して消防局の職員が定期的に救急車の適正利用のための講座を開き、さらな

る啓発に努める。また、応急手当や AED の使用方法の講習会なども行うことができる。

こういった場所を交通の便が良い街中に作ることで、多くの人を訪れることが出来、健康相談等によって市民の健康増進に一役買うとともに、観光を訪れた方々への医療機関の紹介等の相談にも応じる体制を作ることで、対外的にも熊本市に安心して訪れていただけるようアピールをすることにもつながる。

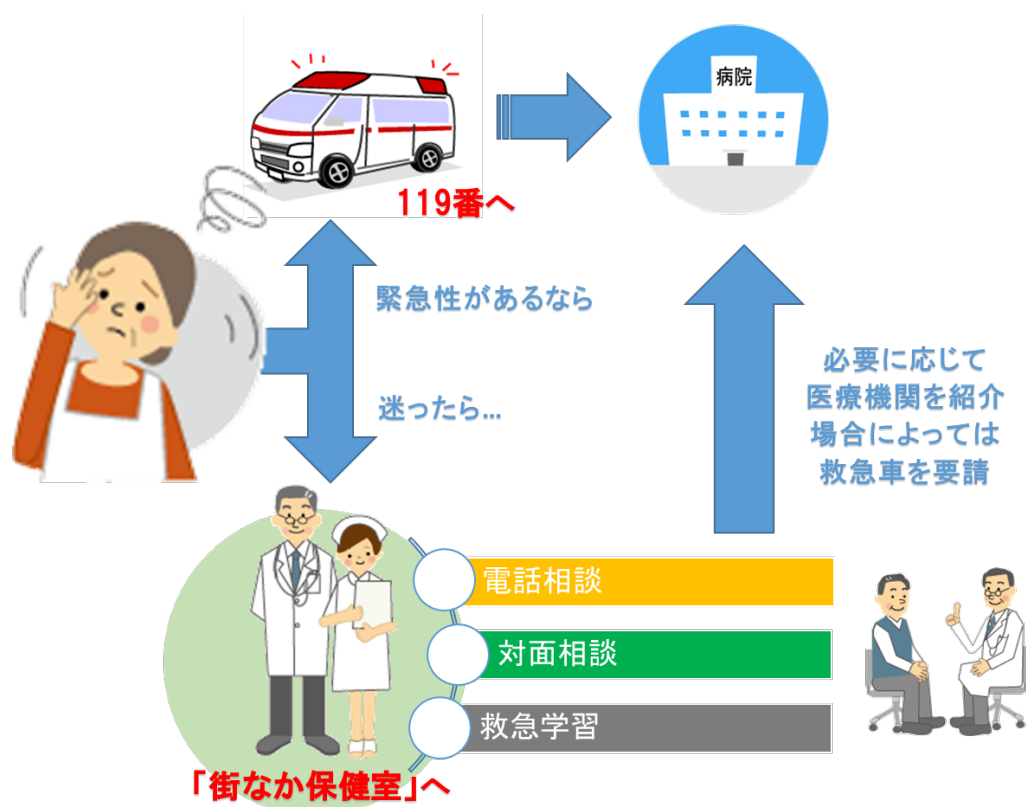


図6 「街なか保健室」イメージ図

ただ、当然ながらこの「あんしん救急ダイヤル」が有効に機能するためには、周知が欠かせない。知名度がなければ利用者は増えないため、このダイヤルの告知のために各世帯に配布するツールを作成した。この告知用紙を市政だよりに挟み込んで配布することで、「どうすればいいの!？」と思った際に、すぐに救急車を呼ぶのではなく一度このダイヤルに掛けてもらえることを期待するものである。(※図7)

体のことで
困ったときは

24時間・365日対応

街なか保健コール



これって救急車を呼んだが
いいのかしら・・・

迷ったら、#0119へ!!

医師、看護師がお電話で状況を確認し、適切なアドバイスを行います。
対応可能な医療機関の紹介や、緊急性があれば救急車を要請します。
また、「街なか保健室」では対面での相談も承っております。
ぜひお気軽にお越しください!!



図7 街なか保健コール告知チラシ

3 役割分担

「くまもと街なか保健室」における各役割の分担は以下のとおりとする。

		役割
利用側	市民	施設を利用することで、救急車の利用に関する正しい知識が身に付く 症状が重くなる前に相談することで、安易な救急車利用につながらない
	観光客	熊本市の医療機関の情報を入手 万一の怪我・病気の際も安心して旅行ができる都市のイメージを持つ
街なか保健室・コール側	救急相談通信員	街なか保健コール#0119の受付 常駐医師/看護師への引き継ぎ 医療機関の案内、受診に関するアドバイス 救急車の適正利用に関する普及啓発活動（ミニ体験講座開催等）
	看護師	電話、対面での救急相談への対応 電話での応急手当アドバイス 直接の応急処置
	医師	看護師では対応困難な相談・処置への対応

4 期待できる効果

この施策を実施することにより、以下のような効果が期待できる。

- ① 軽症者の119番通報を減らすことにより、適正利用を促すことが出来る。
- ② 上記により、現場到着時間の短縮、ひいては重症者の救命率の向上にもつながる。
- ③ 将来的に救急隊の設備や人員にかかるコストを抑制する。
- ④ 住民からの相談に応じることで、健康づくりに寄与する。
- ⑤ 観光客への対応が可能なことで、安全・安心な都市としても対外的にアピールが出来る。

5 将来的な展望

まずは最も集客が期待できる市街地中心部に設置するが、段階的に設置個所を増やして対応出来る地域・人数を増やしていければと思う。

また、保健室のスペースを有効活用して地域住民への啓発活動を積極的に行うことで、救急車のさらなる適正利用につなげていくことが大きな目的でもある。

最初に触れたとおり、救急車の出場件数は年々増加の一途をたどっている。熊本市も急速な高齢化と直面しており、救急に関する問題は今後避けては通れない。

「くまもと街なか保健室」を通じて、住民にはなかなか伝わりづらい現状を広く啓発し伝えることで、正しい知識や理解を醸成し、それが適正利用につながると考

えている。市民にも観光客にも愛される「街なか保健室」が、私たちがめざす「上質な生活都市くまもと」の実現に向けての一助になればと思う。

【参考文献】

総務省消防庁 「平成 26 年消防白書」

熊本市 「平成 26 年消防局救急統計」

熊本市 「熊本市第 6 次総合計画」

熊本市 「挑戦元年アクションプラン」

大阪市 「救急年報」

大阪市 「救急病院受診者アンケート調査の実施結果」